

特 2

611

新門部類函十棚





特42

601

天庫

卦

十八

星

不

己

一本

卦

星

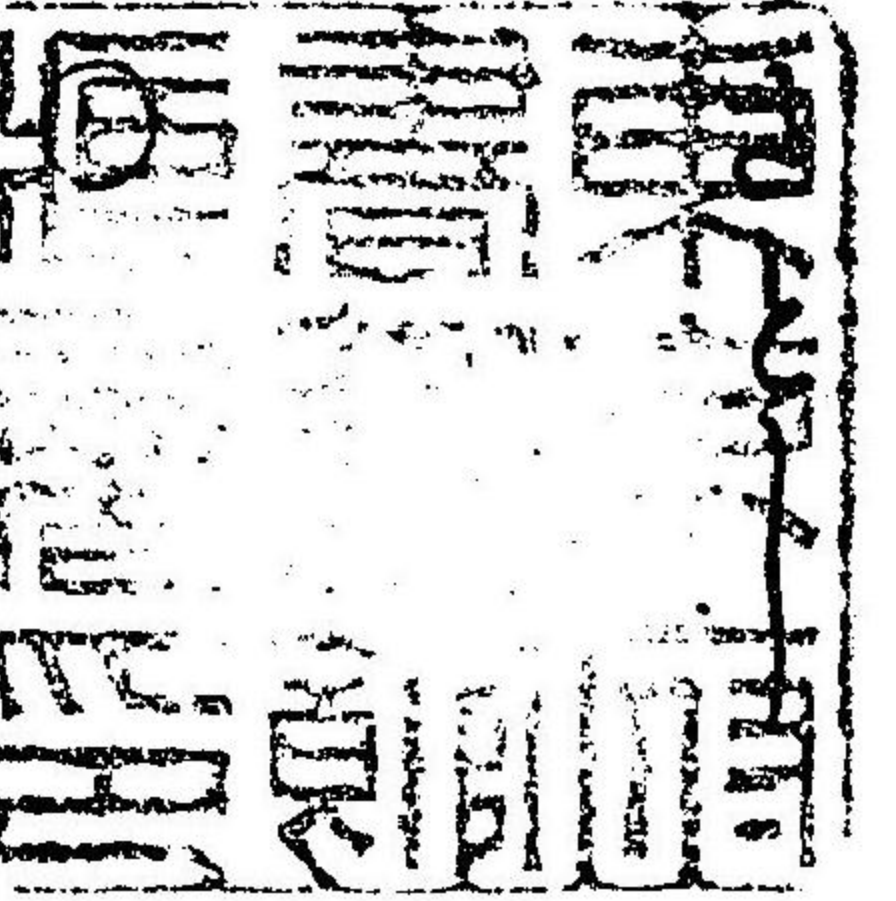


定價二匁





彗星の



稲留鉄太郎述

明治七年甲戌の七月初めより北の方より  
て彗星出たり然るよこの頃の世も文明となり  
行きたまはが、かをのりの事ハ驚くべきものあら  
ざれども、さまがよ未だ女童部ハ如何あやと危  
ふみ思ふものもある由聞けが其あらまを



書つゝりぬ、抑物の多きを譬へて濱の真砂或も  
星の数をりふ古への狂詩も海深しと雖ども  
蝦の尻曲り天廣しとりつとも星具雑々と有て  
幾千萬と限りなくひかなる西洋の天文者おそ  
も一々其形を詳くよまむること能をば金星ハ幾  
萬里土星木星火星水星ハ幾千萬里と推算法ハ  
て店の手代が反物は尺うりおとく明瞭ハ寸尺  
が書つゝりぬと手は取て尋取ることハ叶はず

去りといハ凡眼ふといハ不安心の事あり然一日食  
月食あるものりつとも違ハぬより考ゆまバ又尤と  
思ふも一理なきハ非ざるべしさきども是迎も  
先その證據が一度めとも頭つゝりより皆々安  
心つゝり居ることなり借此彗星とつゝりバ女童  
ハ是下ハ今年ハとんころりめとも流行ハ大地  
震でもゆり出まると直ハ三々が苦くな。胸算  
用ハあまりとりつゝりバ愚くな。事ハあらむや然



一女童部にんごうぶに限かぎらず歴し々の人々ひとびとも大おほく兵へい乱らんでも起おこる前まへ表あらわす又またハ高位たかい高官こうかんの人ひとの身みの上うへは怪け我が過あやまちでも出で来きるあらせうと矢や張はり苦く々の口くちをいられる人もあるあり猶なほも迷まよひの深ふかき人のいつの年としの筈はず星せいは誰たれ々の軍ぐんが初はつまりとりつ年の筈はず星せいは何なにの關かん白はく様さまと何なにの將しやう軍ぐん様さまが死しあはせたと是こゝ非ひ其その年とし中ちゆうは有あつて事ことの目め立たつ事ことを押おしあてどうでもううでも筈はず星せいをさるるはのよせぬが

あゝぬといふやうなる癖くせは成なり来きり去さりといハ氣きの毒どくなる心配しんぱい筋すぢなり備そなへ此こゝ彗すい星せいハ頭かぶあり尾おしありいつも頭かぶハ日ひは向むかふものあり見みえ所ところハ鬚ひげの如ごとく一いなり云いひ傳つたへり併ひらけ様さまは申まをすと最もふをや手て前まへ判はん斷だんめて夫それでハ鶴つるの鳥とり見みえ様さまある物ものうと思おもふ人もあるべし能よく心こゝろを鎮しづめて迷まよを晴はられよ此こゝ星せいの廻まわる道みちをうりか何なにとも分わらぬとあり出でまは大体たい三さんヶ月げつ間かんハ出でるをの併ひらけ短み



うき時もあり又三年目五年目或ハ數十年目何  
百年目と更ニ定まりたる事なり是でハ弥危難  
の前表と迷ひを重ぬらまんも計りごとく去な  
がら夫でハ危乱の有と前後ニ篇星の出ぬ出と  
幾十度もあり是等ハ篇星の無念狀出落ちると  
論せぬばならぬありまゝ恐ろしく咄あり申て  
ハ如何とありんども折角のさとしゆへ卒度此  
よ述べおくなり此星ハ至て日輪の側ニ近き星

みと日輪の熱氣を受ふこと鍛冶のたぐらの中  
よりも烈し此星廻りく地球ニ近寄らば地球  
ハ瞬く間ニ焼け人も鳥も虫も獸も一時ニ焦  
を死なふりと言へる説あり是ハ軍やとんころ  
よりも大分恐るべきなり然れども當時各  
の子孫衆の代もてハ樂と思ふ其故ハ右の變が  
よありあゝあもせよ貳億万里を隔と書てあは  
釋尊出世の曉に説れし十萬億土を隔極樂淨



土よりある遠き所あるはあれハ大体ハ案ド居  
工済ますべきこととなり尤も某々様ハ申せば古  
つより賢き人たも危乱の前表と久々いひ  
傳つらむ且つ太平記あど見むハ陰陽の頭安倍  
の何某ト部の何某等といがめし居占ひ人達も  
此節ハ主上重き御慎みと勘文を捧げし事数々  
見えし手前あど未だ世は知り呉る人もなき  
くらゐの身まがらうしき目口を以て嗚呼がま

と思われんがあはれ某受合の一説あり右古人  
の論も決して無理あはれ如何にといふは近  
譬へて申さんし内の稚子が譯もなくも申こと  
むぐりたる時の親達もそとおおかけが出るよ  
それお廻りがあはれと見ゆよといふありい  
うよおおかけとりぬとどのおおかけでも臺灣人の  
中りよ人をとらふと啖ふものでもなし且つ近來  
御廻りの巡查誠は親切は隅々迄不法を糾さ



とわいつとも三ツ四ツの稚子が泣くのをもあせ  
町中で大聲あげ。そと咎めこそなすも聞かぬ  
なりそれでも親達の口癖もなりて居るは是ハ  
とふ〜と譯ある。也考へ見らるべし最ふ是は  
のた〜とで各〜とろよ明白と悟り得られんと  
おもえられれば古への賢人良士の胸の内分け  
夫々理説よ及ぶぬあり此節ハ數ならぬ某あれ  
と古への清明よ代り少々曖昧の説くも計り難

られど左よ判断書を致し申さべしこのことびの  
彗星ハ天より奮撃を掃つとの御戒めあり四民  
一統ありろを用ゆべきの事と考つられぬその  
次第ハ御維新この〜既よ五六年よおよび上  
主上を初め奉り諸司百官智力を盡しあひ文明  
開化諸業進歩と御世話ありよいまぞ眞の因循  
なり輩少あらざらば十の七八ハ仕来りの俟あき  
銘々産業上の發明奮發等あるは其のもありあめ



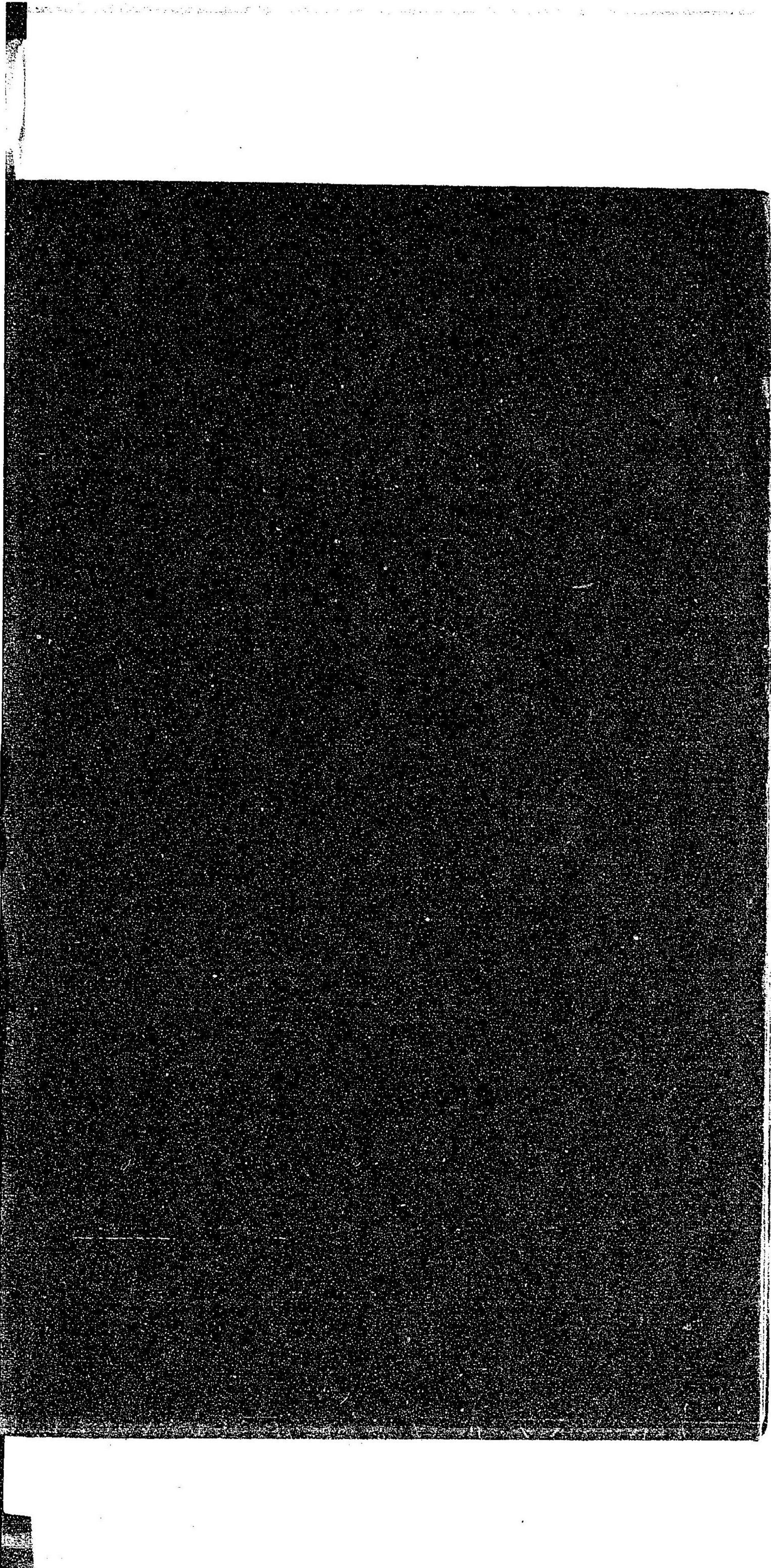
まゝあゝの富國強兵の基ひも立む萬國と立並  
びて日の丸の御旗を朝日の昇るあまの國  
まゝも振り輝くはあまの六つゝあまの然  
まゝ四民一統深くあまのるを用ひらるゝ事よ  
あまの尤も四民といふまゝより男女ともよの合稱  
なれハ女衆ハ地獄をやめと織機藝者をやめと  
縫針麥湯をやめと洗濯且又彼の妾奉公もやめ  
て女學校に入りたまへと箒星の講釈より迷ひ

の雲を掃ひ申し清めまゝす

戌の文月

竹枝堂主人







特42

601



056220-000-6

特42-601

彗星のさとし

稻留 鉄太郎 / 述

[M7?]

CAK-0110

